

佛蘭西書巡覧 30

平山 弓月

作者はなによりもまず詩人であった。人生の詩人であった。そしてこの物語は、一八一五年より三二年にいたるフランスの叙事詩である。そこにおいては、愚昧な一老爺といえども、墮落した一売春婦といえども、みんな古代英雄のごとき光輝を放つ。この光輝は実に作者自身の光輝である。

豊島与志雄



一九世紀のフランス社会は、激しく揺れ動いていました。一八一五年という年は、ナポレオン一世の第一帝政が倒れた年であり、三〇年には民衆たちの手で七月革命が起こされ、反動的な王政復古体制に終止符を打ちましたが、共和政には戻らず、結局はオルレアン家の七月王政が成立してしまいました。

今回取り上げる『レ・ミゼラブル』*Les Misérables*(1862)を私たちに遺したヴィクトル・ユゴー *Victor Hugo*(1802-1885)は、この時代に多感な少年期から青年期を過ごし、早熟な文学的才能を開花させて行きました。帝政下ナポレオン軍軍人のボナパルティストの父と、資産家の娘で王党派の母との間に生まれたユゴーには、両親の確執の影響が色濃く残りました。文学の主流が、演劇と詩であったこの時代、ユゴーの文学的出発もまた詩作であり、処女出版は『オードと雑詠』*Odes et Poésies Diverses*(1822)でした。その後彼の文学的世界は、演劇へと、小説へと拡がってゆきました。

中でも1830年に発表上演された『エルナニ』*Hernani*は、世上に激しい論争を巻き起こした。この作品は従来の古典派の枠を大きく踏み外していたのです。これをよしとするロマン派の人々と、反対する古典派との間で、上演に際しては暴動にも発展する小競り合いが起こされてしまったのです。しかし上演自体は成功裏に終わり、ユゴーは一躍ロマン派の中心に躍り出ました。

『レ・ミゼラブル』は、こういった時代、つまり「権威」というものが揺れ動き、移り変わる時代を背景として持っているのです。作品は全5部からなる長大なもので、ジャン・ヴァルジャン、コゼット、マリユス、ガヴローシュ、ジャベールなどなどの魅力的な人物が次々と現れ来ます。

今稿では、第一部「ファンティーヌ」第二編「墮落」の一節を読んでみましょう。この部分は、皆さんもよくご存じのところだと思います。

お腹を空かせた姉の子のために一片のパンを盗んだ廉で長期に及ぶ徒刑を終えたジャン・ヴァルジヤ

ンは、灯りに誘われ司教館に迎えられたのです。「灯り」は、すさんだ彼の心に響きますが、銀の食器を前にして、彼の悪心がよみがえります。銀の食器を盗んで司教館を逃げ出した彼は、官憲の疑うところとなり、捕縛され司教館に連れ戻されてしまいます。それらは贈りものだと司教の言葉に官憲は去ってゆきます。その後司教はジャン・ヴァルジャンに諭して言います。

L'évêque s'approcha de lui, et lui dit à voix basse : « N'oubliez pas, n'oubliez jamais que vous m'avez promis d'employer cet argent à devenir honnête homme »

Jean Valjean, qui n'avait aucun souvenir d'avoir rien promis, resta interdit. L'évêque avait appuyé sur ces paroles en les prononçant. Il reprit avec une sorte de solennité : « Jean Valjean, mon frère, vous n'appartenez plus au mal, mais au bien. C'est votre âme que je vous achète; je la retire aux pensées noires et à l'esprit de perdition, et je la donne à Dieu. »

司教は彼に近寄って、低い声で言った。「忘れてはいけません、けっして忘れてはいけませんぞ、この銀の器は正直な人間になるために使うものだとなあなたが私に約束したことは。」

何も約束した覚えのないジャン・ヴァルジャンはただ茫然としていた。司教はその言葉を発するのに強く力をこめたのである。彼は一種のおごそかさをもってまた言った。「ジャン・ヴァルジャンさん、あなたはもう悪のものではない、善のものです。私が購うのはあなたの魂です。私はあなたの魂を暗黒な思想や破滅の精神から引き出して、それを神にささげます。」

銀の食器だけでなく、銀の燭台まで手にしたジャン・ヴァルジャンは、それを基にモントルイユの町で、名をマドレーヌと改め成功をおさめ、周囲から市長に推されます。工場で働く薄幸の女性ファンティーヌのけなげな娘コゼットを、悪辣な宿屋の主人から救い出す決心をします。そこに彼を追っていた警部ジャベールが現われ、再び囚われの身になってしまうのです。(以下次稿)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)